岩波文庫

1243

ウィタ・セクスアリス

森鷗外作

岩波書店

昭和一〇年一一月一五日　第一刷発行
昭和三五年九月五日　第二五刷改版発行
昭和四八年六月二〇日　第三八刷　発行

ウィタ・セクスアリス

定価★

作者　森鷗外

東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号
発行者　岩波雄二郎

東京都板橋区板橋四丁目四七番七号
印刷者　山田博

発行所　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・桂川製本

岩波文庫

1243

ウィタ・セクスアリス

森鷗外作

岩波書店

ウィタ・セクスアリス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「昴（スバル）」第七号（明治四十二年七月発行）による。

金井湛君は哲学が職業である。

哲学者という概念には、何か書物を書いているということが伴なう。金井君は哲学が職業であるくせに、なんにも書物を書いていない。文科大学を卒業するときには、外道哲学とSokratesの前のギリシャ哲学との比較的研究とかいう題で、よほど変なものを書いたそうだ。それからというものは、なんにも書かない。

しかし職業であるから講義はする。講座は哲学史を受け持っていて、近世哲学史の講義をしている。学生の評判では、本をたくさん書いている先生がたの講義よりは、金井先生の講義のほうがおもしろいということである。講義は直観的で、ある物の上に強い光線を投げることがある。そういうときに、学生はいつまでも消えない印象を得るのである。ことに縁の遠い物、なんの関係もないような物をかりて来てある物を説明して、聞く人がはっと思って会得するというような事が多い。Schopenhauerは新聞の雑報のような世間話を材料帳に留めておいて、自己の哲学の材料にしたそうだが、金井君は何をでも哲学史の材料にする。まじめな講義の中で、そのころ青年の読んでいる小説なんぞを引いて説明するので、学生がびっくりすることがある。

小説はたくさん読む。新聞や雑誌を見るときは、議論なんぞは見ないで、小説を読む。しかしもしなんと思って読むかということを作者が知ったら、作者は憤慨するだろう。芸術品として見

るのではない。金井君は芸術品には非常に高い要求をしているから、そこいらじゅうにある小説はこの要求を満たすに足りない。金井君には、作者がどういう心理的状態で書いているかということがおもしろいのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壮なとかいうつもりで書いているものが、きわめて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽のつもりで書いているものが、かえって悲しかったりする。

金井君も何か書いてみたいという考えはおりおり起こる。哲学は職業ではあるが、自己の哲学を建設しようなどとは思わないから、哲学を書く気はない。それよりは小説か脚本かを書いてみたいと思う。しかし例の芸術品に対する要求が高いために、容易に取りつけないのである。

そのうちに夏目金之助君が小説を書きだした。金井君は非常な興味をもって読んだ。そして技癢を感じた。そうすると夏目君の「我輩は猫である」に対して、「我輩も猫である」というようなものが出る。「我輩は犬である」というようなものが出る。金井君はそれを見て、ついついいやになってなんにも書かずにしまった。

そのうち自然主義ということが始まった。金井君はこの流儀の作品を見たときは、格別技癢を感じなかった。そのくせおもしろがることは非常におもしろがった。おもしろがると同時に、金井君は妙な事を考えた。

金井君は自然派の小説を読むたびに、その作中の人物が、行住坐臥造次顛沛、何につけても性欲的写象を伴なうのを見て、そして批評が、それを人生を写し得たものとして認めているのを見て、人生ははたしてそんなものであろうかと思うと同時に、あるいは自分が人間一般の心理的状

態をはずれて性欲に冷淡であるのではないか、特に frigiditas とでも名づくべき異常な性癖を持って生まれたのではあるまいかと思った。そういう想像は、Zola の小説などを読んだ時にも起こらぬではなかった。しかしそれは Germinal やなんぞで、労働者の部落の人間が、困厄の極度に達したところを書いてあるとき、ある男女のあいびきをしているのをのぞきに行く段などを見て、そう思ったのであるが、その時の疑いは、なんで作者がそういうところを、わざとらしく書いているだろうというのであって、それがありそうでない事と思ったのではない。そんな事もあるだろうが、それをなぜ作者が書いたのだろうと疑うに過ぎない。すなわち作者一人の性欲的写象が異常ではないかと思うに過ぎない。小説家とか詩人とかいう人間には、性欲の上には異常があるかもしれない。この問題は Lombroso なんぞの説いている天才問題とも関係を有している。Möbius* 一派の人が、名のある詩人や哲学者を片端からつかまえて、精神病者として論じているも、そこに根底を有している。しかし近ごろ日本で起こった自然派というものはそれとは違う。おおぜいの作者が一時に起って同じような事を書く。批評がそれを人生だと認めている。その人生というものが、精神病学者に言わせると、一々の写象に性欲的色調を帯びているとでも言いそうなふうなのだから、金井君の疑惑は前よりよほど深くなって来たのである。

そのうちに出歯亀事件というのが現われた。出歯亀という職人がふだん女湯をのぞく癖があって、あるとき湯から帰る女の跡をつけて行って、暴行を加えたのである。どこの国にもたくさんある、きわめて普通な出来事である。西洋の新聞ならば、紙面のすみのほうの二三行の記事になるくらいの事である。それが一時世間の大問題に膨脹する。いわゆる自然主義と連絡をつけられ

る。出歯亀主義という自然主義の別名ができる。出歯るという動詞ができて流行する。金井君は、世間の人が皆色情狂になったのでない限りは、自分だけが人間の仲間はずれをしているかと疑わざることを得ないことになった。

そのころある日金井君は、教場で学生の一人が Jerusalein の哲学入門という小さい本を持っているのを見た。講義の済んだとき、それを手に取って見て、どんな本だと問うた。学生は、「南江堂に来ているから、参考書になるかと思って買って来ました、まだ読んでみませんが、先生がごらんになるならお持ちください」と言った。金井君はそれを借りて帰って、その晩ちょうど暇があったので読んでみた。読んで行くうちに、審美論のところになって、金井君は大いに驚いた。そこにこういう事が書いてある。あらゆる芸術は Liebeswerbung である。口説くのである。性欲を公衆に向かって発揮するのであると論じてある。そうして見ると、月経の血が戸まどいをして鼻から出ることもあるように、性欲が絵画になったり、彫刻になったり、音楽になったり、小説脚本になったりするということになる。金井君は驚くと同時に、こう思った。こいつはなかなか奇警だ。しかし奇警ついでに、なぜこの説をも少し押し広めて、人生のあらゆる出来事は皆性欲の発揮であると立てないのだろうと思った。こんな論をする事なら、同じ論法で何もかも性欲の発揮にしてしまうことができよう。宗教などは性欲として説明することが最も容易である。キリストを婿だというのは普通である。聖者とあがめられた尼なんぞには、実際性欲を perverse の方角に発揮したに過ぎないのがいくらもある。献身だなんぞという行ないをした人の中には、Sadist もいれば Masochist もいる。性欲の目がねを掛けて見れば、人間のあらゆる出来事の発

動機は、一として性欲ならざるはなしである。Cherchez la femme はあらゆる人事世相に応用することができる。金井君は、もしこんな立場から見たら、自分は到底人間の仲間はずれたることを免れないかもしれないと思った。

そこで金井君の何か書いてみようという、かねての希望が、妙な方角に向いて動きだした。金井君はこんな事を思った。いったい性欲というものが人の生涯にどんな順序で発現して来て、人の生涯にどれだけ関係しているかということを徴すべき文献ははなはだ少ないようだ。芸術に猥褻な絵などがあるように、pornographie はどこの国にもある。婬書はある。しかしそれはまじめなものでない。すべての詩の領分に恋愛を書いたものはある。しかし恋愛は、よしや性欲と密接な関係を有しているとしても、性欲と同一ではない。裁判の記録や、医者の書いたものに、多少の材料はある。しかしそれは多く性欲の変態ばかりである。Rousseau の懺悔記はずいぶん思い切って無遠慮になんでも書いたものだ。子供の時教えられた事を忘れると、牧師のお嬢さんがつかまえてお尻を打つ。それがなんとも言えないいい心持ちがするので、知ったことをわざと知らないふりをして、間違った事を言ったり何かして、お嬢さんに打ってもらった。ところが、いつかお嬢さんが情を知って打たなくなったなどということが書いてある。これは性欲の最初の発動であって、決して初恋ではない。そのほか、青年時代の記事には性欲の事もちょいちょい見えている。しかし性欲を主にして書いたものではないから飽き足らない。Casanova は生涯を性欲の犠牲に供したと言ってもいい男だ。あの男の書いた回想記は一の大著述であって、あの大部な書物の内容は、徹頭徹尾性欲で、恋愛などにまぎらわしいところはない。しかしナポレオンの名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

聞心がはなはだしく常人に超越しているために、その自伝が名聞心を研究する材料になりにくいと同じ事で、性欲界の豪傑 Casanova の書いたものも、性欲を研究する材料にはなりにくい。たとえばRhodos の kolossos や奈良の大仏が人体の形の研究には適せないようなものである。おれは何か書いてみようと思っているのだが、前人の足跡を踏むような事はしたくない。ちょうどよいから、一つおれの性欲の歴史を書いてみようかしらん。実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考えてみたことがない。一つ考えて書いてみようかしらん。白い上に黒く、はっきり書いてみたら、自分が自分でわかるだろう。そうしたらあるいは自分の性欲的生活が normal だか anomalous だかわかるかもしれない。もちろん書いてみないうちは、どんなものになるやらわからない。したがって人に見せられるようなものになるやら、世に公にせられるようなものになるやらわからない。とにかく暇なときにぽつぽつ書いてみようと、こんなふうな事を思った。

そこへドイツから郵便物が届いた。いつも書籍を送ってくれる書肆から届いたのである。その中に性欲的教育の問題をある会で研究した報告があった。性欲的というのは妥でない。Sexual は性的である。性欲的ではない。しかし性という字があまり多義だから、不本意ながら欲の字を添えておく。さて教育の範囲内で、性欲的教育をせねばならないものだろうか、せねばならないとしたところで、はたしてそれができるだろうかというのが問題である。ある会で教育家を一人、宗教家を一人、医学者を一人というぐあいに、おのおのその向きの authority とすべき人物を選んで、意見をたたいたのが、この報告になって出たのである。しかるに三人の議論の道筋はそれ

それ別であるが、性欲的教育は必要であるか、しかり、なし得らるるであろうか、しかりという答えに帰着している。家庭ですがよいという意見もある。学校ですがよいという意見もある。とにかくするがよい、できると決している。教える時期はもとより物ごころがついてからである。婚礼の前に絵を見せるという話はわが国にもあるが、それを少し早めるのである。早めるのは、婚礼のすぐ前まで待っては、その内に間違いがあるというのである。話は下級生物の繁殖から始めて、次第に人類に及ぶというのである。初めに下級生物を話すとはいうが、ただ植物のおしべめしべの話をして、動物も亦復是の如し、人類も亦復是の如しではなんの役にも立たない。人の性欲的生活をも詳しく説かねばならぬというのである。

金井君はこれを読んで、しばらく腕組みをして考えていた。金井君の長男はことし高等学校を卒業する。仮に自分が息子に教えねばならないとなったら、どう言ったらよかろうと考えた。そして非常にむつかしい事だと思った。具体的に考えてみればみるほど言葉をおくに窮する。そこで前に書こうと思っていた、自分の性欲的生活の歴史の事を考えて、金井君は問題の解決を得たように思った。あれを書いてみて、どんなものになるか見よう。書いたものが人に見せられるか、世に公にせられるかより先に、息子に見せられるかということを検してみよう。金井君はこう思って筆を取った。

六つの時であった。

中国のある小さいお大名の御城下にいた。廃藩置県になって、県庁が隣国に置かれることにな

ったので、城下はにわかに寂しくなった。

おとう様は殿様とごいっしょに東京に出ていらっしゃる。おかあ様が、湛ももうだいぶ大きくなったから、学校にやる前から、少しずつ物を教えておかねばならないというので、毎朝仮名を教えたり、手習いをさせたりしてくださる。

おとう様は藩の時徒士であったが、それでも土塀をめぐらした門構えの家にだけは住んでおられた。門の前はお堀で、向こうの岸は上のお蔵である。

ある日お稽古が済むと、おかあ様は機を織っていらっしゃる。僕は「遊んでまいります」という一声を残して駆け出した。

このへんは屋敷町で、春になっても、柳も見えねば桜も見えない。内の塀の上からまっかな椿の花が見えて、お米蔵のそばのからたちに薄緑の芽の吹いているのが見えるばかりである。

西隣にあき地がある。石瓦の散らばっている間に、げんげやすみれの花が咲いている。僕はげんげを摘みはじめた。しばらく摘んでいるうちに、前の日に近所の子が、男のくせに花なんぞ摘んでおかしいと言ったことを思い出して、急に身のまわりを見回して花を捨てた。幸いにだれも見ていなかった。僕はぼんやりして立っていた。晴れたうららかな日であった。おかあ様の機を織っておいでなさる音が、ぎいとん、ぎいとんと聞こえる。

あき地を隔てて小原という家がある。主人はなくなって四十ばかりの後家さんがいるのである。僕はふいとその家へ行く気になって、表口へ回って駆け込んだ。

草履を脱ぎ散らして、障子をがらりとあけて飛び込んで見ると、おばさんはどこかの知らない

娘といっしょに本をあけて見ていた。娘は赤いものずくめの着物で、髪を島田に結っている。僕は子供ながら、この娘は町のほうのものだと思った。おばさんも娘も、ひどく驚いたように顔を上げて僕を見た。二人の顔はまっかであった。僕は子供ながら、二人の様子があたりまえでないのがわかって、異様に感じた。見れば、あけてある本には、きれいに彩色がしてある。

「おば様。そりゃあなんの絵本かのう。」

僕はつかつかとそばへ行った。娘は本を伏せて、おばさんの顔を見て笑った。表紙にも彩色がしてあって、見れば女の大きい顔が書いてあった。

おばさんは娘の伏せた本を引ったくってあけて、僕の前に出して、絵の中の何物かを指ざして、こう言った。

「しずさあ。あんたはこれを何と思いんさるかの。」

娘はいっそう声を高くして笑った。僕はのぞいて見たが、人物の姿勢が非常に複雑になっているので、どうもよくわからなかった。

「足じゃろうがの。」

おばさんも娘もいっしょに大声で笑った。足ではなかったとみえる。僕はひどく侮辱せられたような心持ちがした。

「おば様。また来ます。」

僕はおばさんの待てと言うのをきかずに、走って戸口を出た。

僕は二人の見ていた絵の何物なるかを判断する知識を有せなかった。しかし二人の言語挙動を

ひどく異様に、しかも不愉快に感じた。そしてなぜか知らないが、この出来事をおかあ様に問うことをはばかった。

七つになった。

おとう様が東京からお帰りになった。僕は藩の学問所の跡にできた学校に通うことになった。内から学校へ行くには、門の前のお堀の西のはずれにある木戸を通るのである。木戸の番所の跡がまだ元のままになっていて、五十ばかりのじいさんが住んでいる。女房も子供もある。子供は僕と同年ぐらいの男の子で、ぼろを着て、いつも二本棒をたらしている。その子が僕の通るたびに、指をくわえて僕を見る。僕は厭悪と多少の畏怖とをもってこの子を見て通るのであった。

ある日木戸を通るとき、いつも外に立っている子が見えなかった。おれはあの子はどうしたかと思いながら、通り過ぎようとした。その時番所跡の家の中で、じいさんの声がした。

「こりい。そりょう持ってわやくをしちゃあいけんちゅうのに。」

僕はふいと立ち留まって声のするほうを見た。じいさんはあぐらをかいてわらじを作っている。今しかったのは、子供が藁を打つ槌を持ち出そうとしたからである。子供は槌を置いておれのほうを見た。じいさんもおれのほうを見た。濃い褐色のしわの寄った顔で、曲がった鼻が高く、頬がこけている。目はぎょろっとしていて、白目のうちに赤いところや黄いろいところがある。じいさんが僕にこう言った。

「坊様。あんたあおとっさまとおっかさまと夜何をするか知っておりんさるかあ。あんたあ寝

坊じゃけえ知りんさるまあ。あははは。」

じいさんの笑う顔は実に恐ろしい顔である。子供もいっしょになって、顔をくしゃくしゃにして笑うのである。

僕は返事をせずに、逃げるように通り過ぎた。あとにはまだじいさんと子供との笑う声がしていた。

道々じいさんの言った事を考えた。男と女とが夫婦になっていれば、その間に子供ができるということは知っている。しかしどうしてできるかわからない。じいさんの言った事はそのへんに関しているらしい。そのへんになんだか秘密が伏在しているらしいと、こんなふうに考えた。

秘密が知りたいと思っても、じいさんの言うように、夜目をさましていて、おとう様やおかあ様を監視せようなどとは思わない。じいさんがそんな事を言ったのは、子供の心にも、profanation である、褻瀆であるというように感ずる。お社の御簾の中へ土足で踏み込めといわれたと同じように感ずる。そしてそんな事を言ったじいさんがひどく憎いのである。

こんな考えはその後木戸を通るたびに起こった。しかし子供の意識は絶えず応接にいとまあらざるほどの新事実に襲われているのであるから、長く続けてそんな事を考えていることはできない。内に帰っている時なんぞは、大抵そんな事は忘れているのであった。

十になった。

おとう様が少しずつ英語を教えてくださることになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton